

大塚敬節
矢数道明
責任編集

世漢方医学書集成
7 岡本一抱一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第Ⅰ期・全30卷

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 7 岡本一抱(一)

第Ⅰ期
全30卷

昭和五十四年八月二十四日 第一刷発行
昭和六十年九月二十五日 第二刷発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一二七四九番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えます。

ISBN4-626-01200-0 C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



岡本一抱肖像
(京都・岡本義雄氏所蔵)

凡 例

- 一、本書第七卷「岡本一抱(一)」には、『和語本草綱目』総目く卷之八までを収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 和語本草綱目 版本（元禄十一年版） 二十三卷目錄一卷二十冊（矢数道明所蔵）
- 一、解説は、矢数圭堂（日本東洋医学会理事）が執筆した。

岡本一抱

矢数圭堂

岡本一抱は通称為竹、一得齋と号す。本姓は杉森氏。祖父の杏園は豊臣秀吉に仕え、法印に叙せられ、父の信義は越前・松平侯に仕え、法眼に叙せられた。一抱の代になって京都に移り、初め味岡三伯の門に入り、素問、靈樞、難経などの古典を学び、その高弟となった。

一抱は諸書の諺解を作り、世を啓蒙することを自分のつとめとしてそれに専念し、その書は大いに読まれた。

一抱は近松門左衛門の弟である。あるとき近松が一抱に「お前は無学のものがよんでもわかるような諺解を著しているが、このようなことでは、原典を読まずに諺解ばかりをよむ医者が多くなり、人命を誤るおそれがあるから、やめたがよい」と忠告した。一抱は大いに悟るところがあ

り、これより以後、諺解を作ることをしなかったということである。（富士川游『日本医学史』）岡本一抱の師は味岡三伯で、三伯の師は饗庭東庵である。東庵は元和元年京都に生まれ、曲直瀬玄朔に学び、素問難経を講じて、後世方別派を樹立した。著書には『脈法書』がある。

同門の人としては井原道閑、浅井周伯、小川朔庵などがある。

三伯はその伝は佚せられていて、その術を伝える書としては『味岡三伯切紙』、『味岡流薬性修治』等がある。東庵の医学は道三、玄朔の李朱医学より遡り、劉完素の医学に根底をおいたものであり、一抱の医学も劉医学の瀉火滋陰の法、素問、靈枢、難経を原典としたものである。

一抱は医学の講義に主眼をおき、子弟の教育に明け暮れたということであるが、臨床家としてもすぐれた手腕を持っていたことがわかる。

彼が多数の諺解を著したのは、当時の社会事情から考えなければならない。彼の活躍した時代は、元禄時代で、この時代は徳川幕府により治安が確立し、文化が開花した。またその文化が一般大衆まで浸透した時代であった。医療も一部の独占物でなく、広い層から認められるようになり、それまで小数であった医家が、大量生産される必要が生じたのである。以前は医者といえ、儒者か僧侶を兼ねていたので、漢学に堪能であり、中国医書の原典を読むことも容易であった。しかし急激な医人口の増加により、平易な和文の医書の必要性が生じ、このような諺解が作られたものと考えられる。

『近世漢方医学書集成』に収録したのは、数多くの一抱の著書の中、つぎの三部である。

和語本草綱目（二十三卷目錄一卷）——元禄十一年（一六九八）刊——

この書は『廣益本草大成』ともいう。李時珍の『本草綱目』に記載された藥物に、わが国で呼びならわされた和名をつけ、著者が自ら画いた図を掲載している。内経の思想によって各藥物の解説をしており、臨床家にとっては参考になるもので、本草書としては最高のものといってもよい。内容はつぎの如く分類してある。

草部 卷之一—卷之十

旧薬五〇五種に新附四種で計五〇九種

木部 卷之十一—卷之十四

旧薬一八八種に新附四種で計一九二種

果部 卷之十五

旧薬一一〇種に新附二種で計一二二種

穀部 卷之十六

八一種

菜部 卷之十七

旧葉一〇五種に新附一種で計一〇六種

金石部 卷之十八

一三七種

水部 卷之十九

四七種

火部 卷之十九

九種

土部 卷之十九

六〇種

服器部 卷之十九

六九種

人部 卷之十九

三七種

虫部 卷之二十

一一九種

鱗魚部 卷之二十一

旧品九三種に新附二五種で計一一八種

介部 卷之二十一

旧品五二種に新附一種で計五三種

獸部 卷之二十二

旧品八九種に新附四種で計九三種

禽部 卷之二十三

旧品八九種に新附四種で計九三種

以上のように十六部に分類し、一八三四種の藥物につき、薬性、毒性、使薬、附方、修治などを詳細に解説している。

方意辨義（六卷）——元禄十六年（一七〇三）刊——

『本草綱目』を基礎として、古方、後世方の処方五十四方について、気血痰の病理に立脚し、処方の構成藥物についての解説と、応用、さらに加味方について詳細に解説している。さらに、類似の処方についての比較をのべ、さらに引経報使にも言及している。類書の中では異色あるものといえる。

本書の中にはつぎの処方が挙げられている。その殆んどが後世方に属するもので、古方は五十

四方中九方に止まっている。

四君子湯、異功散、六君子湯、香砂六君子湯、人參養胃湯、加味養胃湯、平胃散、加味平胃散、不換金正氣散、二陳湯、瓜蒌枳實湯、半夏白朮天麻湯、六味地黃丸、加減六味丸、滋陰降火湯、清離滋坎湯、加減滋坎湯、八味丸、加減八味丸、加減金匱腎氣丸、四物湯、茯苓補心湯、八物湯、十全大補湯、逍遙散、加味逍遙散、獨參湯、參附湯、補中益氣湯、歸脾湯、分心氣飲、木香流氣飲、蘇子降氣湯、參蘇飲、香蘇散、十神湯、人參敗毒散、黃連解毒湯、九味羌活湯、麻黃湯、桂枝湯、藿香正氣散、五積散、小柴胡湯、加味小柴胡湯、升麻葛根湯、芍藥黃連湯、行和芍藥湯、芍藥湯、大柴胡湯、大承氣湯、小承氣湯、桃仁承氣湯、五苓散

医方大成論諺解（五卷）——貞享二年（一六八五）刊——

孫允賢の著した『医方大成論』の諺解である。以下七二項について、原文にふりがなをつけ、その下に処方、養生法にいたるまで、判りやすく詳細な解説がなされていて、読みやすい。

卷之一 風、寒、暑、湿、傷寒、瘧

卷之二 痢、嘔吐、泄瀉、霍乱、秘結、咳嗽、痰氣、喘急、氣、脾胃、飢胃、諸虚、癆瘵

卷之三 咳逆、頭痛、心痛、眩暈、腰脇痛、脚氣、五痺、五疸、蠱毒、諸淋、消渴、赤白濁、

水腫、脹滿

卷之四

積聚、宿食、自汗、虚煩、健忘、癲癇、陰癰、痼冷、積熱、吐血、下血、痔漏、脱肛、遺尿失禁、咽喉、眼目、耳、鼻、口脣、牙齒、舌

卷之五

五臟内外所因證治、癰疽瘡癤、瘡疥、瘰癧、折傷、急救諸方、婦人、孕育、胎前、產後、小兒、臍風撮口、口瘡重舌、夜啼客忤、急慢驚風、胎熱胎寒、感冒四氣、疹痘

このほかに岡本一抱の著書にはつぎのようなものがある。この中には、歿後刊行されたものもある。

運氣論諺解

原病式首書

医方講談発端弁

衆方規矩指南

病因指南

和語医療指南

本朝古今医説

万病回春指南

万病治法指南大全

医方切要指南

局方發揮診解

医学正伝或問診解

医経瀉洄集和語鈔

鍼灸阿是要穴集

経穴密語集

医方大成論和語鈔

脈法指南

格致余論診解

養生法指南

難経本義診解

三藏弁解

鍼灸拔萃大成

蔵府経絡詳解

年中運氣指南

岡本一抱は当時、経験的な薬能を口訣的に用いるという方法が多かったところに、内経に基づく

理論的意義づけをした。現在の中国、日本においても帰経（引経報使）の思想を検討しようという氣運がたかまっている。

備考

丸山昌朗氏によれば、「近年発見された、杉森十三世信忠氏所蔵の系図書によると、一抱子の父は杉森信義、幼名斎之助、通称市左衛門で、越前の国の宰相松平忠昌に仕え、児小姓として禄三百石を食んでいた。後年浪人して京都に移り、年六十七歳で歿している。法名は、智妙院道喜日觀居士。墓は京都堀川の日蓮宗大本山本圀寺にある。

母は喜里、法名知法院貞松日喜大姉、享保元年の歿で、墓は摂津の広濟寺にある。

一抱子は、信義と喜里の間に生じた五人兄弟の三男で、幼名は金三郎、後、伊恒と称した。

一抱子の長兄は智義、幼名は市三郎、後、甚右衛門とも称し、織田侍従長頼に仕え、江戸で卒している。享年三十七歳。

次兄は信盛、幼名次郎吉、近松門左衛門である。承応二年に生まれ、享保九年十一月二十二日、七十二歳で歿している。

一抱子の弟には権四郎、五郎吉の二人があつたが早世したらしい。（『漢方の臨床』第九卷

第十一、十二合併号)

一抱の生年と歿年は、正確なことは判明していないが、丸山昌朗氏は『漢方の臨床』誌同号でつぎのように述べている。

「一抱子の生年は不明である。しかし次兄の近松の生年は承応二年（一六五三）である。

寛文十一年（一六七一）に北村季吟の門弟である而慍齋山岡元隣が選述した俳書『宝蔵』の中に杉森一族の句が載っている。この時、門左衛門は十九歳で、末弟の五郎吉が十一歳であった。すると四男の権四郎は十二歳以上であるから、寛文十一年には一抱子は十八歳から十三歳の間になる。これから推察すると一抱子の生年は一六五四—一六五九年の間で承応三年か、明暦元年—三年か、万治元年—二年のいづれかに当ることになる。」

土井順一氏は『日本医史学雑誌』第二三巻第四号でつぎのようにのべている。

「正徳四年刊（成立は正徳三年）『医学切要指南』巻之中に『余十八歳ニシテ医学ニ志シ朝夕素難ニ意ヲ刻コト四十有余年、遂ニ其ノ奥旨ヲ得ズト雖トモ、十四ノ難ノ損至ハ後世ノ労瘁タルコトヲ考ル者ハ、愚者ノ一得ナラン歟。サレトモ自是タリト決スルニ非ズ、此ノ書ニ述テ以テ後チノ君子ノ再正ヲ待ノミ』とある。正徳三年が十八歳から医学を学び始めて「四十有余年」経過した年であるならば、一抱子は、この年、次兄の近松門左衛門が六十一歳であるので、五十九歳か六十歳である。さらに、正徳四年刊「和語医療指南」の序文（同年九月執筆）には、

「洛下隱医法橋岡本為竹一抱子」と署名がある。一抱子はこの年以後の著作に「隱医」を称している。これによつてこの年に還暦を迎えたのではなかったか、と推定し、逆算すると、生年は承応三年（一六五四）となる。」

つぎに歿年であるが、丸山氏は「一抱子の門人門間嘉寛がまとめた素問諺解の序文をみると、嘉寛は、一抱子が他界してから十有八年の歳月を経過して、享保十八年に到つて、ようやく先師の講義に基づいた本書が完成されたとの感慨をもらしている。この序文に従うと、一抱子の歿年は、享保元年（一七一六）と推定される」と述べている。

一抱子の墓は京都本圀寺（下京区猪熊通松原南）にある。

法名 演言院意在日実。

一抱の生年が承応三年（一六五四）だったとすると、享年は六十三歳であったことになる。なお兄の近松門左衛門はその八年後、享保九年（一七二四）『曾根崎心中』『国姓爺合戦』『心中天網島』など数々の傑作を残して七十二歳の生涯を閉じたのであった。